新交響楽団第128回演奏会

アマチュアオーケストラ

松

●指揮
山田　一雄
新交響楽団名誉指揮者

ドヴォルザーク…交響曲第9番ホ短調
新世界より

ドビュッシー／ビュセール編…小組曲
レスピーギ…交響詩
ローマの松

1990
7月22日(日)東京文化会館

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第128回演奏会

ドヴォルザーク：交響曲第9番ホ短調「新世界より」作品95

Antonin Dvořák：Symphony No. 9 “From the New World” e-minor

第1楽章　Adagio-Allegro molto
第2楽章　Largo
第3楽章　SCHERZO Molto vivace
第4楽章　Allegro con fuoco

休　憩

ドビュッシー/ビュセール編曲：小組曲

Claude Debussy：Petite Suite

小舟にて　En bateau
行列　Cortège
メヌエット　Menuet
バレエ　Ballet

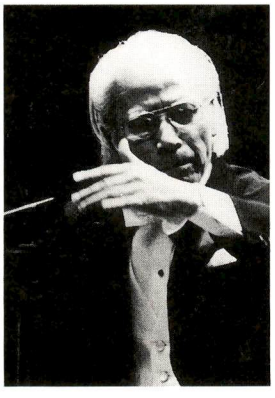
レスピーギ：交響詩「ローマの松」

Ottorino Respighi：Pini di Roma – Poema sinfonica

Ⅰ. ボルゲーゼ荘の松　Pini di Villa Borghese
Ⅱ. カタコンブ付近の松　Pini presso una catacomba
Ⅲ. ジャニコロの松　Pini del Gianicolo
Ⅳ. アッピア街道の松　Pini della Via Appia

1990年7月22日(日)2:00 p.m.
東京文化会館
主催：新交響楽団

指揮
山田　一雄
（新交響楽団名誉指揮者）



1912年東京生まれ。1935年、東京音楽学校ピアノ科卒業、37年専攻科修了。マーラーの弟子プリングスハイムに作曲を学び、日本放送協会懸賞1等、ワインガルトナー賞などを得て作曲家としての地位を築く一方、ローゼンシュトックに指揮法を学ぶ。1941年新交響楽団（現N響）補助指揮者、翌42年、日本交響楽団と改組の際、専任指揮者に就任。マーラーの交響曲第8番、ストラヴィンスキー「春の祭典」、ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」等、多くの日本初演、邦人作品初演を手掛け、日本の音楽界の指導的役割を果たした。

現在、京都市交響楽団芸術顧問正指揮者、新星日響名誉指揮者、日本マーラー協会理事長等をつとめる他、東京芸大、武蔵野音大等で指導にあたっている。

76年紫綬褒章、78年芸術選奨文部大臣賞、84年勲四等旭日小綬章、86年芸術院賞を受けた。84年より当団名誉指揮者。

ドヴォルザーク

交響曲第9番「新世界より」

楽器編成：フルート２、オーボエ２（コールアングレ持替）、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、弦５部

我々が音楽を演奏するとき、そのほとんどは楽譜を見ながら弾くことになる。暗譜するといっても、それは楽譜を暗記することだから、結局は同じことだ。ただ、その楽譜というものは意外にやっかいなものなのである。先だって、私はモーツァルトのカルテットを弾く機会があったのだが、その時に持ちよったパート譜（ベーレンライター版とペーター版）にかなりの相違があったのである。音の違いはともかく、アーティキュレーションの違いはとても一か所や二か所などというものではない。例えば、モーツァルトはスタッカートの𝅘𝅥と𝅘𝅥を区別して書いているのだが、ペーター版ではすべて𝅘𝅥のみになってしまっているのである。明らかに作曲者がつけたものではないスラーについては、ことばもない。この版では、校正者の解釈がすでに楽譜の中に盛り込まれているといってもよいのである。楽譜を扱うときには、こういったことに対してかなり用心してかからなくてはならない。

前置きが長くなってしまったが、「新世界」の場合はどうであろうか。時代が新しくなればなるほど、そういった心配も少なくなってくるのが普通だが、「新世界」は例外である。事の発端は「新世界」が脱稿してからジムロック社より出版されるまでにある。ドヴォルザークはアメリカで作品を完成させ、自筆譜の「写し」をヨーロッパに送ったのだった。要するに、「写し」を送ってから出版されるまで、ドヴォルザークは一切ノータッチなのである。「写し」を作った時点での転記ミス、作曲者の手を経ない校正など「新世界」の楽譜は初めから大きな爆弾を抱えていたのである。これではミスプリントの出ない方がおかしい。事実、「新世界」の楽譜は長らく指揮者、演奏者泣かせの曲であったらしい。そこで、1955年にチェコから全集版の一部として“決定版”が出版されたのだが、事態はここでも好転しなかった。というのは、これがかなり杜撰（ずさん）な編集であったのである。そして、これがまた流布されることになる。この時点で正しく修正が加えられていれば、こんな文章を書くこともないのだが……。

その例を一つだけ挙げよう。２楽章の初め、弦楽器には全員「弱音器をつけて」の指示がある。ところが、中間部のクライマックスが終ったあと、弦のプルトソロ（最前列２人ずつだけで演奏）になる前に、再び「弱音器をつけて」の指示が現れる。同じ指示を２回するのはナンセンスだから、その前のどこかに「弱音器をはずして」の指示があるはずだと考えられる。1986年にやはりチェコから出版されたその改訂版では、オーボエが３連符の舞曲調の旋律を吹くところ（弦は長い音をひっぱっている）で順にはずすことになっている。その根拠は何かと言えば、ドヴォルザークがチェコフィルを指揮したときのパート譜の書き込みなのである。一つのことを明らかにするのに、何と多くの労力が費やされるのだろうか。その他にも音やリズムのミスプリントなど、たいへんな量にのぼっている。だが、先にも述べた1986年に出た版は綿密に校訂が加えられているので、まずそのような心配はなくなったのである。これは日本版も出版されていて、容易に入手できる。この版は、巻末に編集方針や改訂の根拠になった事柄を詳細に述べてあるから、興味のある方には一読をお勧めする。ただ、それに拠ったパート譜が出版されない限り、本当の意味での解決とは言えないが。スコアとパート譜を照合するのは、恐ろしいほど根気のいる作業なのである。

でも演奏が始まったら、今まで書いてきたことはすべて忘れて下さい。音楽の中身とは何の関係もありませんから。

（Vc. 長島　良夫）

ドビュッシー/ビュセール

小組曲

楽器編成：フルート２（２番ピッコロ持替）、オーボエ２、クラリネット２、バッソン（ファゴット）２、ホルン２、トランペット２、ティンパニ、シンバル、タンブリン、トライアングル、ハープ、弦５部

この曲に限って言えば、目を閉じて聴くのがこの曲の正しい聴き方だと、私は思います。ドビュッシーは印象派の絵画のようだ、と言われています。この曲はそれほど顕著ではありませんが、それでも目を閉じて聴くと、そのことが良くわかります。それに、目を開いて舞台を見ると、そこでは、印象派とは少し感じの違う人たちが、指揮者や楽譜と闘っていて、「日の光のまだ眩しい午後、緑に囲まれた小さな湖に小舟を浮かべて、美少年の吹く銀の横笛に聞き入る美少女は……」というわけには行きにくいのです。

この曲はハープのアルペジョに乗ったフルートの美しい旋律で始まります。フルートとハープ、という組み合わせは、色々な楽器のデュエットがあるなかで、気品に充ちた最も美しいもののひとつだと思います。このフルートの素晴らしい演奏を聴かせてくれるのは我等がソロ・フルーティスト、インスペクターで子持ちの松下俊行おじさんです。…やはりここは目を閉じて聴いた方が……。

二曲目もフルートで始まります。二本のフルートで速い三度進行です。三小節目からオーボエが同じ形で続きます。ほとんど行進曲。風変わりな小さい行進曲。幼い男の子と女の子が手をつないで、戯れながら森の小道を二人っきりの行進。真中辺で道草をくいます。

三曲目は旋律のとてもきれいなメヌエット。最初の八小節はオーボエ、クラリネット、コールアングレの三人が吹く、一寸東洋的とも思える序奏で始まります。それに続いて、新響が誇るバイオリンたちが、長沢俊明をコンサートマスターとし、自慢の名器を従えて美しい旋律をすきとおるような音で歌います。本当ですよ。

四曲目はダンス、祭、フィナーレ。賑やかに、元気に、ドンチャン騒ぎ。でも、フランスのことだから、ドンチャン騒ぎも、上品でどこか寂しい。

しかし、この曲をピアノ曲で作ったドビュッシーも偉いけど、ピアノ曲から編曲して、こんなにも素敵で、音色的にも素晴らしい上品な管弦楽曲に変身させた編曲者アンリ・ビュセールも本当に、エライ！　（Ob. 桜井　哲雄）

ローマ観光一日コース

レスピーギ：交響詩「ローマの松」

楽器編成：フルート３（３番ピッコロ持替）、オーボエ２、コールアングレ、クラリネット２、バスクラリネット、ファゴット２、コントラファゴット、ホルン４、トランペット３、トロンボーン４（通常４番はテューバ）、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小シンバル、タムタム、トライアングル、タンブリン、ラガネラ、グロッケンシュピール、チェレスタ、ピアノ、オルガン、蓄音器（小夜鳴鳥の声のレコード）、ハープ、弦５部、ブッキーナ６（「軍隊用金管楽器」―通常はトランペット、トロンボーンなどで舞台外で演奏される）

今回の旅行は？　チェコからフランス、そしてこのローマですか。いつもドイツ、オーストリア、それからロシアも多かったのに、今回は趣きを変えて、心境の変化ですか？　せっかくだから存分に楽しんで下さい。ローマは良い所ですよ。“永遠の都”、歴史の重みが桁違いです。あれは国家統一を果たしたエマヌエル２世の統一記念堂（**次頁写真**）です。1871年だから明治維新の３年後です。新らしい国なんですよ、イタリアは。あの並木をご覧なさい。変な格好ですがあれが「ローマの松」です。ちょうど良い、これから先はあのレスピーギの名曲をたどりながら「ローマの休日」といきましょう。

レスピーギは国家統一成ったばかりの1879年、北イタリアのボローニャで生まれました。グルメには有名な町ですが、ヨーロッパ最古の大学のある、小さいながら大変知的な町です。名門の出で、父から音楽の手ほどきを受けた後、地元の音楽学校でヴァイオリンと作曲を学びました。在学中の1901年と２年、イタリアオペラ団の公演に参加してペテルブルグに行き、そこでリムスキー・コルサコフに作曲を学んでいます。かなりの影響を受けたことは、あの色彩豊かな曲を聞けばおわかりでしょう。

さあ、ボルゲーゼ公園につきました。曲はここの松林の中を遊びまわる子供たちの様子をローマ生まれのエルサ夫人から聞いた童唄などを交えて作られています。貴族ボルゲーゼ公の個人の庭園が市民に開放されたのはレスピーギ27歳の時です。まだ記憶に新しかったのでしょう、開放の喜びを小さい市民たちに託し、ことのほか元気に描いています。それにしてもさすがイタリアのガキども、騒がしさは並外れています。梅檀は二葉より芳し、これは「ローマの二葉」ですね。おっとローマの松は五葉でした。

つぎのカタコンブというのは２世紀から９世紀ごろのキリスト教徒の地下墳墓ですが、ローマ皇帝の迫害をのがれ、集会、儀式の場として迷路のように広がったもので、



ローマ周辺に40か所近くあり全長数百キロに及びます。今日は最も有名なアッピア街道沿いのサン・セバスチアノ寺院のカタコンブへ行きましょう。あそこにはおあつらえ向きの松もあります。

ところでレスピーギといえば「ローマ三部作」ですが、彼がサンタ・チェチリア音楽院の教授となってローマに移り住んだ最初の頃はローマが嫌いで、ホームシックで仕事も手につかず、転職を考えたぐらいでした。当時は南北の対立が今以上にひどく、故郷とは段違いのローマの大都会の喧騒になじめなかったんでしょう。でも優秀な弟子だったエルサ夫人を得てしだいに家庭も仕事も充実し、今残る多くの名曲を作曲しました。オペラ一辺倒だった当時にあって、彼のライフワークは伝統と栄光のイタリア器楽を今に蘇えらせることでした。ホームシックを癒すためにも、音楽院の図書館にこもって古楽譜の研究に没頭しました。カタコンブをとりあげたのも、死を賭けても自らの信仰を守った、いわば聖地として今尚崇められていること、加えて壁画や装飾に初期キリスト教美術を伝える重要な価値があること等、イタリアの栄光と伝統に共鳴したためでしょう。曲はグレゴリオ旋法を模して作られ、地の底からわき上る悲しみの聖歌のようなメロディーは"詩編唱のように"演奏するよう指示されています。

それでは次のジャニコロの丘へ行きましょう。ローマ7つの丘の1つで、テベレ川をはさんでローマ市街を美しく見渡せる所で、やはり松林が広がっています。曲は小夜鳴鳥（ナイチンゲール）の鳴く夜を描いています。小夜鳴鳥は冬を北アフリカで過ごし、春のほんの2か月くらいヨーロッパ本土に春の訪れを告げてまわり、夏は北欧まで翼を延ばす鳥です。だからヨーロッパ人にとって春の使者として親しまれています。この丘は眺めが良いだけではありません。19世紀中ば、ナポレオン3世軍との戦場となって、国家統一のきっかけを作った歴史的に由緒ある場所でもあり、その時の英雄ガリバルディの像が建てられています。この曲が作られた2年前に、ムッソリーニによるファシスト党内閣が成立し、世の中の雲行きが怪しくなりかけたのを感じとったレスピーギが、春告げ鳥の歌声に託して祖国の平和を訴えた、というのは考え過ぎでしょうか。強国に侵略された時代に、レジスタンスとして最も勇敢に闘ったボローニャ市民の血筋の彼のこと、あながち的外れとは思いませんが。

最後に配した「アッピア街道」からもこのことがうかがえます。ではまた戻りましょう。ローマ帝国華やかなりし頃の公道の総キロ数は8万5千キロ、面積にしたら8倍の現在のアメリカのハイウェイ網とほぼ同じなんです。まさに「すべての道はローマに通ず」、ローマの栄光そのものですね。その中で"街道の女王"と呼ばれたのがこのアッピア街道です。今でもわずかながら残る2千年前の石畳を松並木が見守っています。ユリウス・カエサルがクレオパトラを連れてローマへ凱旋し、あまたの武将、皇帝が戦場へと往き来したこの道を、レスピーギは壮大な勝利の行進曲として描き、古代の栄光へと思いを馳せています。「……軍隊ラッパが鳴りわたり、夜明けの太陽の輝きの中、執政官の軍隊が"聖なる道"をなだれをうつように進み、カンピドリオの丘における凱旋へとのぼってゆく」レスピーギがピアノを弾きながら語ったイメージをグアスタッラがまとめた文章が楽譜に添えられています。

前作「ローマの噴水」が音で自然の印象を表わしているのに対し、この曲は松をそれぞれの旧跡を見守る生き証人に見立て、古い時代への憧れを喚起しています。つまり印象主義から脱し、彼独自の交響詩を獲得してゆく道でもあったわけです。

さあ、これで一通り見てまわりました。お疲れ様。どうもイタリアに永く住んでいるせいか、1人でしゃべりまくってしまいました。

どうでしたか？　ローマの印象は。おや、寝ちゃってるよ、この人!!

（Perc. 上原　誠）

巨匠の全生涯を集大成する

芥川也寸志 その芸術と行動

出版刊行委員会・編

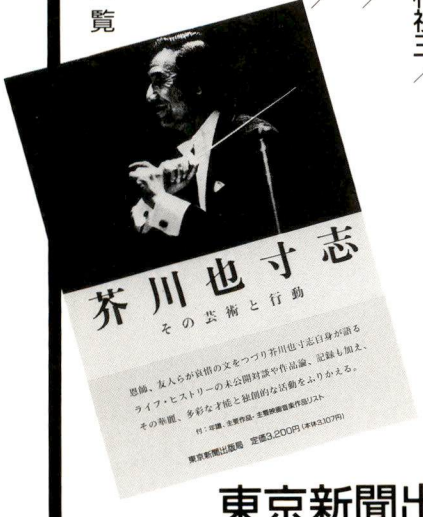


A5判 上製 295頁 定価三、二〇〇円(税込み)

恩師、友人らが哀惜の文をつづり芥川也寸志自身が語るライフ・ヒストリーの未公開対談や作品論、記録も加えて、その華麗、多彩な才能と独創的な活動をふりかえる。

執筆者 團伊玖磨／伊福部昭／黛敏郎／いずみたく／林光／佐藤一晴／門馬直美／松村禎三／萩原道彦／近藤滋郎／小宮多美江／間宮芳生／池辺晋一郎／寺西春雄／河江一仁／舟本貞男／小泉博／武満徹／三善清達／秋山邦晴(執筆順)

◇未公開対談(芥川也寸志・秋山邦晴)
◇主要作品リスト
◇映画音楽主要作品リスト ◇年譜 ◇著書一覧



東京新聞出版局 (中日新聞 東京本社) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)740-2674 振替/東京5-497
書店で発売中。東京新聞・中日新聞販売店でも取りつぎます。

暮らしに素敵を一輪、
タカシマヤ。



たとえば花を一輪飾る…。素敵な暮らし、快適な生活にこだわれば必要なものが見えてきます。
ファッション、味、インテリアなど、かたちあるものから、快適な生活提案まで、時代とともに皆さまにおとどけします——タカシマヤ。

高島屋

東京・大阪・京都・洛西・堺・和歌山・横浜・港南台・玉川
立川・大宮・柏・高崎・岐阜・泉北・岡山・米子

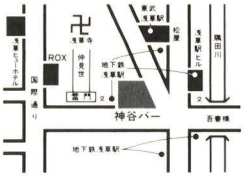


明治生まれの粋なカクテル
『デンキブラン』
甘い香りのハーモニーを、お聴きください。

創業明治13年——デンキブラン

神谷バー

1階神谷バー 2階レストラン 3階和風割烹 浅草1丁目1番1号
☎03(841)5400 ご宴会・ご商談にもご利用ください。〔火曜定休〕




21世紀へ、
音楽のある地球を
贈ります。
心を豊かに、気持ちを弾ませ。
時には励まし、時にはなぐさめ。
そんな素敵な音楽を、守り続けて
いきたい。21世紀も、もっともっ
とずっと先も。この地球が、音楽
のある星であってほしいから。
JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本 美由起
〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)502-6551